ウィーン 1996年:
「EU選挙とオーストリア」と「オットー・バウアーのウィーン」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上条, 勇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/418

ウィーン1996年
－「ＥＵ選挙とオーストリア」と「オットー・バウアーのウィーン」－

上　条　　勇

はじめに

私は、1996年４月から1997年１月末までの10ヶ月間、学術振興会特定国派遣研究者として、ウィーンに留学した。２編からなる本稿は、このウィーン留学体験に基づき、書かれたものである。

「ＥＵ選挙とオーストリア」は、1996年のオーストリアにおける初めての欧州議会選挙を報告したものである。オーストリアにおける各政党の紹介からはじめて、選挙結果を分析し、最後に当時のオーストリアのかかえている問題をとりあげている。この欧州議会選挙をこれほど詳しく報告したものは、管見のかぎりでは、我が国にはいまだ見あたらない。この報告は、ウィーン滞在中、選挙の興奮がまだ覚めやらない、選挙当日からおよそ一ヶ月後に、ある雑誌の依頼原稿として書かれた。しかし、この報告は、雑誌に掲載されなかった。それから時間が過ぎるうちに、新鮮味が薄れ、この報告を発表する機会は失われたと思われた。

ところが、1999年10月に実施されたオーストリア国民議会選挙の結果、状況が少し変わった。この選挙で、イェルク・ハイダー率いる右翼政党の自由党（FPÖ）が躍進し、得票率26.91％（前回21.9％）、52議席（前回41議席）を獲得して、得票率では国民党（ÖVP）を上まわり第２党となった。反対にこれまで長年政府を主導してきた社会民主党は、第１党を守ったものの、得票率、議席数ともに大きく後退した。選挙の結果、結局、国民党と自由党の連立政権（黒青連合）が誕生し、社会民主党は野党に下るにいたった。

ハイダーは、ナチズムを礼賛し、外国人排斥を過激に唱えていたことで知ら

れている。こうした右翼政党の政権参加にたいしては、フランスをはじめとした他のEU諸国が猛反発し、オーストリアに制裁措置をとったことはまだ記憶に新しい。日本でも一躍ハイダーの名前が知られるにいたった。

自由党は、1962年から1983年までは国民議会選挙の得票率6%前後の政党であったが、1968年にハイダーが党首になっていらい、1995年選挙での若干の後退を例外として、躍進を遂げてきた。1999年10月選挙の結果を予感させる象徴的な出来事は、すでに1996年の欧州議会選挙に見られた[1)]。そこで、当時のハイダーと自由党の状況に触れた私の報告が再び発表に値する価値を取りもどしたといえる。こうした理由から、若干の修正を加えたうえで、あらためてここにこの報告を掲載するものである。

「オットー・バウアーのウィーン」は、「金沢大学経済学部　海外交流室だより」(第4号、1997年3月25日)に発表したものを、若干の修正の上、転載するものである。私の留学の主要な目的は、オットー・バウアー研究とオーストリア現代史研究であった。ウィーンの労働運動史研究所、抵抗資料文書館などで、手紙、新聞報道、論文などの資料を集めるかたわら、私は、ウィーンにおけるバウアーの足跡をたどることにした。小論は、主として、足で調べたバウアーのこうした足跡、バウアーに関するウィーンの研究者らと私のやりとりを取りあげたものである。バウアーは、我が国ではあまり知られていないが、狭い範囲ではあるが、オーストロ・マルクス主義者、民族問題の専門家として注目されてきている。今後のバウアー研究に資するために、小論をここに転載するものである。

なお、以上の2編は、かつての掲載先を考慮して、異なる文体で書かれているが、文章の調子を損なわないために、ここに掲載するにあたって、あえて文体を統一しないことにした。

注1)　現代オーストリアの選挙分析と政党制度については、フォルクマール・ラウバー『現代オーストリアの政治』(須藤博忠訳、信山社、1997年)が詳しい。参考までに、同書87頁から、1945から1995までのオーストリア国民議会選挙の表を掲げておく。

	得票率				議員数[1]			
	ÖVP	SPÖ	FPÖ[2]	その他[3]	ÖVP	SPÖ	FPÖ[2]	その他[4]
1945	49.79	44.59	—	5.6	85	76	—	4
1949	44.03	38.71	11.66	5.6	77	67	16	5
1953	41.25	42.10	10.94	5.7	74	73	14	4
1956	45.95	43.04	6.52	4.5	82	74	6	3
1959	44.19	44.78	7.70	3.3	79	78	8	—
1962	45.43	43.99	7.04	3.5	81	76	8	—
1966	48.34	42.56	5.35	3.7	85	74	6	—
1970	44.69	48.42	5.52	1.4	78	81	6	—
1971	43.11	50.03	5.45	1.4	80	93	10	—
1975	42.94	50.42	5.40	1.2	80	93	10	—
1979	41.90	51.02	6.06	1.0	77	95	11	—
1983	43.22	47.65	4.98	4.2	81	90	12	—
1986	41.29	43.12	9.73	5.9	77	80	18	8
1990	32.06	42.80	16.63	8.5	60	80	33	10
1994	27.67	34.92	22.50	14.5	52	65	42	24
1995	28.30	38.32	22.08	11.4	53	72	41	17

[1] 1945-70：165議席；1971-90：183議席

[2] 1956年前はVdU（Verband der Unabhängigen）

[3] 1945-62主としてKPÖ；1966主としてDFP（Demokratische Fortschrittliche Partei: SPÖからの分裂グループ）；1970-79主としてKPÖ；1983-90主として緑の党
1994緑の党（7.31％）および自由フォーラム（5.97％）

[4] 1945-56：KPÖ；1986および1990：Crüne Alternative; 1994: Grüne（13議席）および自由フォーラム（11議席）

Sources: Dachs et al. 1991; official result of 1994 election. ただし、1995年についてはDer Standard Dezember 18, 1995自由フォーム9議席（5.28％）、緑の党8議席（4.57％）

Ⅰ　ＥＵ選挙とオーストリア

ウィーンに秋風が吹き、石畳に散らばった黄色い落ち葉をカサカサと揺らしている。いつの頃からか、ウィーン大学の横に焼き栗と焼きジャガイモを売る焼き芋屋が姿を現し、香ばしい匂いをたてている。焼き栗を買って、近くのベンチで食べる。真ん中を包丁で切ってあって実に食べやすい。塩味の、少し干せた栗は、思いの外おいしい。歴史を刻んだ古い街並みを見つめながら、ふと物思いにふける。時は慌ただしく過ぎゆく。新聞、雑誌の一面を埋めた10月13日の選挙、すなわち欧州議会とウィーン市議会の同時選挙も、遠い昔の出来事のように思える。この間、日本の衆議院選挙があり、オーストリアでも大きくニュースに取り上げられていた。私も、21日、『国際衛星版・朝日新聞』を街角で買い、隅々まで読んだ。旧社会党すなわち社会民主党の手痛い敗北。予想していたとはいえ、ひどいものだ。私の通っている労働運動史研究所の若い

所員に新聞を示し、日本でも社会民主党が大敗北を喫したと語った。労働運動史研究所は社会民主党（SPÖ）系で、彼も社会民主党の党員である。先の選挙でSPÖが大敗北を喫したので、彼は私の話に興味を示した。日本の衆議院選挙と同じ日、フィンランドでもＥＵ選挙で社会民主党が敗北した。私は、彼に、世界中いたるところで社会民主党が負けているねと語った。

（１）選挙の光景

選挙の行われる１ヶ月ほど前から、ウィーン市内のいたるところに選挙ポスターが貼りめぐらされた。電車の停留所の掲示板には、ウィーン市長のホイプル（SPÖ）がにこやかに笑う巨大ポスターが貼られた。電柱その他利用できるものはすべて利用して選挙ポスターが貼られている。

共産党（KPÖ）などの泡沫政党を除いて、オーストリアの政党は５つである。

一番大きいのは、社会民主党。戦後、一時期を除いて、ずっと政権を担当してきた。社会パートナーシップといわれる労資対等の政治経済システムに基づき、独特の社会福祉国家を築き上げてきた。フラニツキーが党首で、すでに10年間首相の座にある。労働運動史研究所の若い所員のあいだでは人気がないが、知性あふれる紳士然とした風貌をしている。

二番目の政党は国民党（ÖVP）で、日本では、自民党と新進党に当たる。カトリック教の伝統を担った党で、10年前から、社会民主党と連立政権（「大連立」という）を形成している。最近党首についたシュッセルは、いつも蝶ネクタイをしており、いささか気取った若い男である。副首相と外相を兼ねている。（1999年の選挙の結果として生まれた連立政権では首相に就任した。）

三番目の党は、自由党（FPÖ）で、名前とは裏腹に、ナチズム、ファシズムの伝統を継承した右翼政党である。10年前に党首になったハイダーは、ナチズムを礼賛し、外国人労働者を排斥する。スポーツマンタイプの若い男で、じつにかっこいい。政治に不満をもつ大衆の間に人気がある。

残り２つの政党は、国民の６－８％の支持を得ている、ほぼ同等の政治的実力をもつ緑の党（Grüne）とリベラーレ（自由フォーラム）である。

緑の党は、女性、環境問題などを取り上げる市民政党である。1986年の選挙で初めて国民議会に進出した。党首のクリストフ・コールヘアは、額のはげ上がった、髭の蓄えた男で、実によくまくしたてる。学者然ともしている。

リベラーレは、3年前の1993年に新たに結成された政党で、都市中間層に支持基盤をもつ。唯一女性の党首であるハイデ・シュミットは、なかなか議論の切れ味があり、感じもいい。私は、選挙前日、ウィーン大学近くのショッテントーア地下で彼女の選挙活動を偶然目撃し、支持者と握手している場面をビデオに撮影した。思わぬところでビデオカメラを向けられた彼女は、じっとこちらを見つめていた。

街角にこれら5つの政党のポスターが、色とりどりに並ぶ。政党にはそれぞれ色がある。社会民主党は赤である。友人に党員手帳を見せてもらったが、その表紙も赤であった。オーストリアの国旗にSPÖと書き記したシンボルマークには、長年政権を担当し、この国を代表してきたという自負がうかがわれる。国民党のカラーは黒である。したがって、社会民主党と国民党の「大連立」の政権は、赤黒連合と言われる。自由党は青である。街角に青というより紺を背景としたハイダーのポスターが目立った。緑の党のカラーは、緑である。緑のGがシンボルマークである。リベラーレは、水色のLをシンボルマークとしている。

私は、これら5つの政党の選挙ポスターをカメラやビデオにとりまくった。道行く市民は、観光の名所ではなく、あらぬ方向にカメラを向ける私をいぶかしがった。ウィーンの選挙の光景は、日本とはまるっきり異なる。選挙宣伝カーががなりたてることもない。街角に氾濫するポスターで、選挙だと実感する。ハイダーが点数をあげフラニツキーが評判を落としたテレビの5党首討論会、ニュースで伝えられる集会の光景、道や広場に机を置いてパンフレット、チラシを配る、たまに目にする光景が、選挙の雰囲気を伝える。要するにいたって静かなのだ。選挙当日の街角の静けさには驚かされた。日曜で店が休みとなっているメインストリートのケルントナー通りの人影も少ない。

当日の朝、私は、隣の部屋に住んでいる女子学生に、近くの投票所の場所を聞いた。彼女は、近くの公園横の幼稚園と教えてくれた。どの党に投票するか、

もう決めたのと聞くと、若者らしい政党の名をあげた。じつは、新聞のニュースで浮動票が40％と伝えていたので、彼女はどうかな、と思ったのだ。日本と同じく、オーストリアでも無党派層、浮動票が増える傾向にある。

私は、教えてもらった投票所に出かけた。1階の監視員に、日本の研究者だが、投票光景をビデオに撮らせてほしいと頼んだ。彼はうさんくさい顔をして、私の前に立ちはだかった。手紙爆弾テロの予告もあって、怪しいやつと思ったのだろうか。結局、彼は、2階で聞いてみたらと言った。2階の女性監視員は友好的で、邪魔にならない程度に、ということでビデオを撮らせてくれた。日本とほとんど変わらぬ投票光景であった。ただ、投票用紙は、政党の名前の頭のところに丸い欄があり、日本とは逆に、選ぶ政党にマルではなくバッテンをつける。そういえば、試験の選択問題も正解にバッテンをつける。こんなささいなことにも、文化の違いがある。

（2） 社会民主党の大敗北と右翼の大躍進

選挙の開票速報は17時半から始まった。知り合ったブルガリアの青年が来ていて、ビールを飲みながら、一緒にテレビを見た。オーストリアのテレビは、ORF1とORF2の2つの局しかない。いずれも国営放送である。このうちORF2を使って、その夜ずっと選挙情報を伝えていた。驚いたことに放送始まってすぐにコンピュータを用いて選挙結果の予測が出た。それが実に正確だった。初めてのEU選挙だったこともあり、去年の国民議会選挙の支持率と比較して論じられる。以下、ＥＵ選挙の最終結果を示しておく。

	EU選挙	95国民議会選挙	議　席
社会民主党	29.2	38.1	6（- 2）
国　民　党	29.6	28.3	7（+ 1）
自　由　党	27.6	21.9	6（+ 1）
レベラーレ	4.2	5.5	1（+-0）
緑　の　党	6.8	4.8	1（+-0）
	（%）	（%）	合計21議席

選挙結果の特徴については、すでに日本の新聞報道で取り上げられていると思うが、一応、説明しておこう。一言で言えば、EU加入を担った社会民主党の大敗北、右翼の自由党の大躍進と言える。

かつて絶対過半数を越える国民の支持を受けたこともある社会民主党のみじめな凋落。テレビに陰鬱なフラニツキーの顔が大写しになった。彼は、インタビューに答えて、「シュラッペ（敗北）」と吐き捨てた。シュラッペにはビンタという意味があり、ビンタをくらわされたというニュアンスの発言だ。その後、憂鬱なフラニツキーの顔写真が新聞それに『プロフィール』、『ニュース』などの週刊誌の表紙を飾った。それとは対照的なのは、自由党のハイダーだった。彼は、満面笑みを浮かべて語った。「私が党首になった当時の自由党は5％政党だったが、今や社会民主党と肩を並べるにいたった。」国民党のシュッセルは、「1966年いらい30年ぶりに我が党が連邦レベルの選挙で第1党になった」と強調した。いずれにしても、社会民主党、国民党、自由党の3党の横並びという結果だ。気の毒なのはリベラーレのハイデ・シュミット。選挙当日の報道では、議席を得ることのできる4％の得票率にいたらず、議席を失ったと伝えられていた。選挙速報の終わりの時間にすぐに催された5党首座談会でも、フラニツキーと並んで、うつむき加減の彼女の憂鬱な顔が映し出された。リベラーレの議席獲得が決まったのは夜遅くなってからで、彼女は、薄氷を踏む思いであったろう。緑の党のコールヘアは、胸をはって、67.2％という低投票率の中、「絶対的得票数を増やした唯一の党」と誇らかに語っていた。

（3）社会民主党の敗北の原因

今回の社会民主党の敗北の直接的な原因は、1995年のEU加盟によるオーストリア国民の経済状況の悪化にある。1994年のEU加盟をめぐる国民投票の際、社会民主党は、物価が安くなるとか、雇用が増えるとか、EU加盟に関して国民に過大な期待を抱かせた。この宣伝は、確かに、国民投票で事前の予想を上まわる66％の高い加入支持をもたらした。また、1995年末の国民議会選挙で、右翼自由党の政権樹立（黒青連合）を許すなという危機宣伝もきいて、社会民

主党の勝利になおも導いた。しかし、1996年に入ると、EU加盟のマイナスの効果がじわじわと国民生活に効き始めた。物価が思ったほど下がらず、逆に倒産と失業が増加した。失業率は7％とオーストリアでは最悪とも言える水準に達した。来年（1997年）なおも増加するという予測もある。フラニツキーは、テレビ討論で批判に答え、オーストリアの失業水準はEU加盟国中最も低いと宣伝したが、これは答えになっていない。

それと1999年1月における経済通貨同盟（EMU）の第三段階のスタート、単一通貨ユーローの発足に向けて、財政の健全化をはかり、参加基準（収斂基準）を満たすために、大きな財政赤字を抱えるオーストリアは、財政削減法（「シュパールパケット」）を制定した。これは公共料金の値上げなど国民に負担を強いるものであった。公務員の削減も企てられ、4月に私を迎え入れた留学生業務の担当者も首を切られた。大学の予算節減と学生への負担増も企てられ、4月にウィーンに来て私が最初に目にしたのは、ウィーン大学学生の抗議ストライキであった。私は、ウィーン経済大学の学生たちと大学授業料の有料化について話したことがある。日本の国立大学のことを念頭に、授業料のある程度の有料化はやむをえないのではないかという私に、彼らはとんでもないと応えた。親のすねをかじる日本の大学生と違い、オーストリアの大学生の多くは、親から自立し、働いて自分で学生生活の費用をまかなっているから、授業料の有料化は打撃だとのことであった。不況、失業、企業の倒産整理、公共料金の負担増と、ウィーンの市民生活は暗い。

経済負担の増大が、とりわけ若者、年金生活者、労働者、低所得層を襲っている。勤労者と弱者の味方であり、かつて労働者政党であった社会民主党の政府のもとで、こうした事態が進行しているのだ。今回の選挙で特徴的だったのは、社会民主党が、1995年の国民議会選挙で労働者（ブルーカラー）の41％の支持を得ていたのに対して、24％の支持しか得られなかったことだった。それに対して右翼の自由党は、50％の労働者の支持を獲得した。ハイダーは、「我が党は労働者政党である」と宣言した。そればかりか、図にのって「自分はクライスキー（かつての社会民主党の党首兼首相で国民の間に多大な人気が

あった）を後継する」とさえうそぶいた。ある新聞の風刺画で、オーストリアの伝統のいいところばかりを集めて着飾る孔雀姿のハイダーが描かれた。ファシストとはこういうものである。人気とりのために無原則ともいえるスローガンを掲げる。社会民主党の支持者のかなりの部分が今回の選挙で棄権したが、その理由として政府の政策に対する不満をあげた。

経済状況の悪化は、自由党にとって追い風になった。選挙前の5党首討論会で犬猿の仲であるフラニツキーとハイダーが円卓に並んですわった。ハイダーはフラニツキーの発言に再三横やりを入れ、首相の権威を傷つけることに成功した。そして、雇用増ではなく失業増といった公約違反をつき、また、オーストリア国民が財政削減で苦しんでいるのに首相は外国に多額の贈り物をしていると述べた。自由党はEU政策として、EUにおけるオーストリアの分担金の引き下げを掲げた。ハイダーの発言と政策は、決して建設的でなく、政府の失点をつき、点数をかせぐものだが、国民の心情に訴えるものであった。EU選挙における社会民主党の敗北と自由党の大躍進へのレールはこうして敷かれた。

（4）ＥＵ選挙とオーストリア

今回のEU選挙を通して気がついたのは、本来は国民議会選挙で問われるべき、国民の直接的生活利害の問題がむきだしの形で選挙の争点となったことである。欧州議会は、EU共通の課題に取り組むところで、決してオーストリアの直接的生活利害の問題を主張するところではない。今回の選挙では本当はEUの中でオーストリアの果たす役割、オーストリアの針路と未来のヴィジョンが積極的に問われなければならなかった。ところが、選挙前のアンケート調査では、失業問題が選挙における関心事の第一位を占めた。もちろんEU加盟後の経済の不調は、国民にとって大きな問題である。しかし、政府に対する批判を越えて、EUにおけるオーストリアの将来のヴィジョンとの関連で問題を問うという姿勢が、国民と野党の間で弱かった。EU加盟は当面するところではオーストリアに好影響を与えなかった。むしろマイナスであった。ではどうするのか。この点、建設的にものごとを考えるのではなく、政府とりわけ社会

民主党を批判するという、後ろ向きの気分が国民の間に強かった。社会民主党も、EU加盟にともなうオーストリアの構造転換の必要と過渡期における痛みの問題を、国民に説得的に説明する姿勢を欠いていた。そもそも、後述のように、ショック療法にともなう国民への犠牲の押しつけは、国民党の政策としては理解できるが、一応勤労者を代表する社会民主党の政策としては疑問の残るものである。

疑問とされるのは社会民主党の選挙綱領である。つまり、社会民主党は、EUの社会基金に基づき、EU共通の雇用政策（失業対策事業）を進めると主張した。これが失業に悩むオーストリア国民の利益につながると言う。この政策を進めるために社会民主党の議席を増やせ、というのが社会民主党の強調するところであった。欧州議会におけるオーストリアの議席数は、626議席中わずか21議席だが、217議席をしめる最強の社会民主主義勢力を背景にしていることを訴える。「ヨーロッパにおける強さ、オーストリアのための強さ」が、社会民主党の選挙スローガンだった。

しかし、すぐに気がつくことだが、たとえEUを「雇用同盟」とすることに成功できても、失業率の点で最良の状態のオーストリアに失業対策事業の重点が置かれるという保障はまったくない。EU全体の長期的なヴィジョンとしては社会民主党の政策は一応理解できるものの、それはオーストリアにとって即効的なものではない。5 党首討論会で緑の党のコールヘアは、社会民主党のEU政策のこの曖昧さをよくついていた。しかし、彼も雇用政策を議論の重点とすることによって、EU政策を即効的な失業対策という生活利害の次元に集中して論ずるという姿勢を示していた。

自由党のスローガンは、扇動的である。「我々はオーストリアを代表する」とか、「選挙の日は（EU加盟の）支払い決算日である」と露骨にナショナルイントレストを強調した。国民党は、中立政策の維持を望む国民の声がまだ強いのを考慮し、オーストリアのNATO加入というこれまでのヨーロッパ安全保障問題に関する同党の主張を弱め、女性首席候補のウルゾラ・シュテンツエルのイメージ選挙に徹した。テレビ映りのいい彼女は、急速に国民の人気を得、そ

の結果、国民党に投票した動機の30％が候補者の魅力というアンケート結果を生んだ。

EU政策をめぐるEU共通の課題と直接的生活利害の問題を混同する国民の気分はよくわかる。また、この気分を利用した政党の選挙宣伝も、選挙戦術としてはよく理解できる。しかし、忘れてはならないのは、オーストリアはもはや後戻りできないということだ。今回の選挙では、EU加盟は誤りだったという批判もあるが、多くは、EU加盟は不可避だったが、それにともなう痛みは嫌だというフラストレーションを感じている。あまりに痛いので、痛みを与えた社会民主党を恨むという国民の心情が今回の選挙結果に直接現れた。こうした心情は、国民党支持者よりも社会民主党支持者に多く抱かれていた。

ここで私見を述べると、オーストリアのEU加入は不可避だった。東欧、旧ソ連のリアル社会主義が崩壊していらい、東西冷戦体制の狭間にたって、中立政策を掲げ、漁夫の利を得るというオーストリアの国際政治の基盤は失われた。また、かつてハプスブルク帝国に属した東欧諸国がオーストリアを中心に「ドナウ連邦」を形成するという現実的見通しもない。東欧諸国の大半は、小国オーストリアを見ずに、EU加盟を望み、大国ドイツとの関係強化とその援助を期待する。オーストリア自身は、貿易依存率が高い上に、1989年の時点ではEUとの貿易が輸出では63.8％、輸入では67.9％を占めていた。その内、ドイツとの貿易は、輸出では34.5％、輸入では43.6％を占めていた。ドイツへのオーストリアの経済依存は強く、オーストリアをドイツの植民地と言う人もいる。オーストリア人の間には、ドイツ人がオーストリアをドイツの何番目かの州と思っているのではないかという劣等感があるようにみえる。今年（1996年）ドイツ連邦首相コールが初めてオーストリアを公式訪問したが、その時ある新聞は、フラニツキーがコールと対等に肩を並べて話していると、喜びに満ちた報道をした。

さらにオーストリアは、1973年いらいの景気対策としてケインズ主義的な赤字財政政策を続け、1980年代には厖大な財政赤字、国家債務の累積が問題となるにいたった。また、オーストリアの生産の30％を占める国有企業の赤字と

財政による補填が問題となり、いずれにしてもオーストリア経済の構造的な改革が不可避となってきた。1989年にオーストリアがEU加盟の方向に進んだ背景には、こうした現実があった。つまり、オーストリアはEU加盟によって起死回生することを期待したのである。EUに加盟しなくても、財政再建と国民のその負担は、不可避の問題となったろう。また、オーストリア経済の国際競争力のない部門のリストラと経済全体の構造改革は不可避だったろう。しかし、違いは、EU加盟が、こうした問題を、ショック療法的に提起したことにあった。事態に関する説明も十分でなく、経済悪化、生活悪化の原因をすべてEU加盟のせいにする国民の気分が出てきてもおかしくない。

政府の政策に問題がなかったわけではない。私には、オーストリアがEUの中で大きな役割を果たそうとして、背伸びしすぎているように思えてならない。私は、そこに、かつてのハプスブルク帝国の栄光を忘れられないオーストリアの幻想を見る。そういえば、今年は、オーストリッチという言葉が公文書で初めて使われて1000年ということで「オーストリア1000年」が祝われ、ナショナル意識を昂揚させる試みがなされた。今回のEU選挙にもハプスブルク帝国の最後の皇帝の孫カール・ハプスブルクが国民党の候補者となり、当選して話題を読んだ。私は、こうした背伸びを止め、等身大のオーストリアで、ショック療法を和らげ、弱者に経済的負担を押しつけることを止め、オーストリアの当面する困難な問題に関する国民の理解を深める中でその構造転換をはかり、冷戦体制崩壊後のオーストリアの国際政策のヴィジョンをめぐって議論を進めることが可能であったと考える。国民党が現在のEUを支配する自由競争礼賛とコスト削減の動きに加わり、新自由主義ないし新保守主義を遅ればせながら（15年遅れ）主張することは、企業の利害を代表する保守主義政党だから、理解できないことはない。しかし、社会民主党は、まがりなりにも勤労者を代表する政党である。この政党が勤労者の利害に反することをおこなったとき、その没落は急速に進む。現在、戦後のオーストリアの政治・経済体制を支えてきた労資協調体制すなわち社会パートナーシップが、コスト削減の自由競争のかけ声のもとに、危機を迎えている。ウィーンの秋は悩み深き秋である。

（5）最後に一言

最後に余談ながら、10月19日に、シュタートオーパー（国立オペラ座）で久々にオペラを見た。ワーグナーの「さまよえるオランダ人」が出し物であった。ワーグナーの雄大な音楽に酔い、いい気分で家に帰る途中、電車の中で老夫婦に話しかけた。

「EU加盟によって物価はさがりましたか？」

「部分的に、生活手段は。でもそんなに大きく下がってはいません。」

「EUに加盟してよかったと思いますか？」

「小さなオーストリアがEUに加盟することは不可避でした。」

老夫婦の話は、比較的冷静であった。彼らがどの政党の支持者であるかは問わない。私は、最後に、調子にのって、「そうですね。オーストリアは広大な経済領域を必要としていますね。」と言った。彼らは、そうそうと頷いた。しかし、オーストリアの国内政治は、今後、EUの問題をめぐって、いろいろ揺れ動くことになろう。電車を降りながら、私は、この国の将来を思って、急に気が重くなった。

（1996年11月脱稿）

Ⅱ　オットー・バウアーのウィーン

1996年の 4 月から今年の 1 月末まで、私は、ウィーンに留学してきました。私の留学の主要な目的は、オットー・バウアーに関する調査・資料収集とオーストリア現代史研究でした。

バウアーは、19世紀末から戦間期にかけてウィーンで活躍した代表的なオーストロ・マルクス主義者です。1907年に大著『民族問題と社会民主主義』を著して民族問題の専門家として有名になり、戦間期にはオーストリア社会民主党の事実上の最高指導者として活躍しました。つまり、バウアーは、オーストリアにとって、現代史の一方（労働運動側）の雄をなす歴史上の人物です。私の関心は、バウアーが現在のオーストリアでどのように扱われているかを調べる

こと、また、オーストリアにおけるバウアー研究者と交流することにありました。

ウィーンに着いてさっそくバウアー関係資料のたくさんあると思われる労働運動史研究所に行ってみました。労働運動史研究所は社会民主党系で、W.マーダターナー所長は、社会民主党員です。研究所の建物は、戦前まで社会民主党の事務局があったところです。後に私は、社会民主党の幹部会が開かれていたという部屋に案内され、バウアーがいつもすわっていたという席にすわり、記念写真を撮らせていただきました。最初に出会ったのは、体の大きいマールクスという名の若い研究所員です。バウアー研究を目的として来たと言ったら、彼は、しばらくして、厚い紙ばさみをドカッと置いて行きました。後でわかったのですが、研究所にバウアー個人文庫があり、彼の関係資料は7つの紙ばさみにしまわれています。この資料を調べていたら、1975年から9巻刊行されたバウアー著作集の目次や編集上のやりとりが出てきたりして、労働運動史研究所がバウアー著作集の刊行に大きくかかわっていることがわかってきました。バウアーの手紙もよく整理されていたのですが、これも著作集刊行のときに用意されたものとうかがわれます。

研究所員のマルクースとはよく話しました。それと研究所図書部門の責任者ハロルド・トロッホともよく話す機会があったのですが、彼らは、社会民主党左翼に属しています。社会民主党出身の首相フラニツキーについてどう思うか、と聞いたら、答えは否定的でした。社会民主党の右翼であるし、シュパール・パケット（財政節減法）を導入して、若者の間で評判をひどく落としていました。ついでにフラニツキーの後継者は誰かと聞いてみたら、蔵相のヴィクトル・クリマーであるとのことでした。後に知ったのですが、クリマーは、クロンプリンツ（皇太子）と呼ばれ、彼がフラニツキーの後継者であることは誰もが認めるところでありました。実際に、私の帰国直前の1997年1月18日、フラニツキーの首相辞任をうけてクリマーが新首相に決まり、彼のもとで組閣を行うことになりました。知的ではあるが決断力に欠き、対人関係もよそよそしいフラニツキーに対して、クリマーは、有能な実務家で決断力もあり、人当た

りもいいという評価をうけていました。マルクースとトロッホの予測は当たったのですが、彼らの話の中では、クリマーについては評判はよくありませんでした。社会民主主義の原則にこだわらないプラグマティストという話だったと思います。トロッホは、「クリマーカタストロフィー」（クリマーの首相就任は左翼にとって破局的という意味）とさえ言っていました。

マルクースらに、現時点でオットー・バウアーについてどう評価するかと、もっとも気になる質問もしてみました。彼らの話では、バウアーの弟子を認ずるＪ.ヒンデル（左翼理論家で社会民主党の青年教育で活躍）が死んで以来、バウアー支持者はもはやいないだろうとのことでした。私は、すかさず、「ぼくはオーストリアにおける最後のバウアー支持者だね」と言いました。バウアーは、第二次大戦後、右派が支配する社会民主党で不遇な扱いを受けてきたのですが、左翼（レーニン主義ないしトロツキー主義的）の中でも支持を得ていないという印象を受けました。マーダターナー所長とこの件について話したら、彼は、バウアーはマルクス主義とか社会主義の範囲を越えて、民族問題の専門家として現代になおも生きていると語っていました。

オーストリアでも、バウアーについて盛り上がった時期がありました。それは、バウアー生誕100年の1981年のことです。労働運動史研究所のバウアー個人文庫には、バウアー生誕100年を記念する様々な新聞の切り抜き、雑誌記事、シンポジウム、研究論文が集めてありました。これらから、当時いかに盛大にバウアー生誕が祝われたかがうかがわれます。この年、バウアー記念切手が発行されています。バウアー個人文庫の中に、切手の貼った封筒を見つけ、欲しくなり、ウィーンの街の切手屋を2、3軒まわったのですが、見出すことができませんでした。バウアー切手は、ひょんなことから手に入りました。秋にニーダーエーステルライヒ州の州都ザンクト・ペルテンでのある記念式典に赴いたところ、会場の仮設郵便局で、これまで発行された記念切手の販売があり、その中にバウアー切手を見つけたときは、うれしくてたまりませんでした。バウアー切手を5枚買いました。その他、バウアー記念コインが発行されるという新聞記事があったのですが、このコインはとうとう見つけることができませ

んでした。

ウィーンには、これまでの有名人の名前をつけた通りがたくさんあります。また、マルクス主義の創始者マルクスの名がついた労働者アパート「カール・マルクスホフ」、エンゲルスの名前がついた「フリードリッヒ・エンゲルス広場」というのもあります。日本を出る前から、オットー・バウアーガッセ（小路）があるということは知っていました。8月末のある日、カメラをもって、オットー・バウアーガッセに行ってみました。ウィーン市ストリート辞典によると、オットー・バウアーガッセは、旧名カゼルネンガッセと言い、カゼルネンガッセ2番にバウアーが住んでいたことから、その名前がつけられたという話です。オットー・バウアーガッセは、ウィーン子がよく行く有名な商店街マリアヒルファー通りに接してあります。このガッセで、バウアーが住んでいた家を捜しましたが、なかなか見つかりません。ウィーンでは、歴史的な建物には、説明を書いたプレートと旗がかかげられているのですが、そんなものはどこにもありません。その当たりと見当をつけて、タバック（直訳すればタバコ屋となりますが、タバコ以外に新聞雑誌、市交通の切符定期券、印紙、警察への居住届け出用紙など売っている街角に数多くある店）に入って、バウアーがかつて住んでいた住居はどこかと聞いてみたのですが、店の人は知らないとのことでした。がっかりして、途中オットー・バウアーガッセに見つけた社会民主党地区党組織の事務局に入って訊いてみたのですが、事務局長のモニカ女史はわからないと答えていました。彼女は、同僚にも訊いてくれましたが、同僚もわからないとのことです。彼女は、「なにしろ古い歴史のことですから、地区博物館に行って調べてみたら」と語っていました。そんなに古い歴史とも思えないのですが。この事実は、現在の社会民主党におけるバウアーの位置づけを端的に物語っていると思えました。モニカ女史の部屋には、社会民主党の歴代の重要人物の写真が貼ってありましたが、その中にバウアーの写真がないことが気にかかりました。そのことを問いただすと、女史は、「写真は歴代党首のものであり、バウアーは党首でなかったから」と説明してくれました。他日、もう一度、オットー・バウアーガッセに行ってみたところ、通りの端の建物の

玄関に「カゼルネンガッセ２番」という古い表示がありました。とうとう見つけたと感動し、建物の中に入りたいと思ったのですが、建物の管理人が不在で、とうとう入ることはできませんでした。仕方がないので、写真をパチパチ撮るにとどめて帰りました。

オットー・バウアーガッセに関連して、ドクター・カール・レンナーリンクのことを思い出しました。レンナーリンクは、パルラメント（国会議事堂）のあたり、つまりウィーンの中枢部にあります。旧ウィーン市街を囲む城壁を壊して作られたのがリンク（環状道路）で、レンナーリンクはその重要な一角をなしています。私は電車でこのリンクを幾度ともなくグルグルまわったのですが、電車の中で「ドクター・カール・レンナーリンク」というアナウンスを聞く度に考え込んでしまいました。戦間期バウアーは社会民主党左派、レンナーは右派を代表し、両者は激しく路線対立しました。結局、バウアーは、ファシズムに破れ、亡命の地で客死し、それに対して、レンナーは生き延び、戦後オーストリア第二共和国の初代大統領つまり建国の父になっています。私は、小さな目立たないオットー・バウアーガッセとウィーン中枢部のドクター・カール・レンナーリンクという通りの差に、戦後におけるオーストリアでのバウアーの哀しい位置づけを感じとってしまいました。

次ぎにバウアーの墓について語りましょう。バウアーの墓は、映画「第三の男」の最後のシーンで有名な中央墓地（ツェントラル・フリートホフ）にあります。彼は、最初は、客死した亡命の地であるパリのペール・ラシェーズ墓地に埋葬されました。彼の遺骸は、第二次大戦終了後、盛大な式典のもとに、中央墓地に移されたのです。労働運動史研究所のバウアー個人文庫の中に、その時の写真が数枚ありました。写真のひとつに、フロリトドリフの労働者たちに囲まれてバウアーの棺云々という注意書きが見出されたとき、私は驚きました。じつはフロリトドリフは私の最初に住んだ住居から街の中心に行く時に必ずそこで乗り換える交通の要路をなしています。私は、デパート、スーパーなどがあるそこの商店街で食料品、日用品、電気器具などを度々買い物しました。写真のこの注意書きが気になり、後で調べたところ、フロリトドリフは、ウィー

ン市自治体住宅（労働者アパート）群のあるところで、バウアーがファシズムに破れた1934年の 2 月蜂起の時に、激しい戦闘のあった場所であることがわかりました。この事実を見出した時、思わず不思議な因縁さえ感じてしまいました。

ウィーンでの生活が落ち着いた 5 月のある日、私は、カメラをもち、電車に乗って中央墓地を訪れました。ウィーン市のはずれにあり、不案内に行ったら迷子になりそうな広大な墓地です。墓地には 3 つゲートがあります。私は、訪問者にとってもっともポピュラーな、音楽家たちの墓に通ずる第二ゲートから入りました。ゲートの詰め所で、墓地の、結構厚い案内書を買い、その地図を見たら、第三ゲートの近くにバウアーの墓があることがわかりました。が、散歩のつもりで、そのまま墓地の中を歩いていくことにしました。墓にはきちんと番号がふってあり、簡単に見つかるだろうと、たかをくくって行ったのが、後の祭り。広い並木道をえんえん歩いていっても、なかなかたどり着かず。最初は、墓地というよりは公園のようで気持ちがいいと思ったのですが、人影もまばらで、ときには一人っきりになることもあります。寂しさと不気味さを覚え、少し不安になりました。多くの墓には、ルーエ・シュテレ（安息所）と書いてあります。結局、人に道を聞き、やっとたどりつきました。目印は、1848年 3 月革命の戦没者たちの記念碑で、その向かいに意外と目立たない形で、バウアーの墓がありました。オーストリア社会民主党創設者のヴィクトル・アドラーらの遺骸も納められている大理石の墓。胸像などはなく、近づいて小さなプレートを読んで初めてわかる目立たない墓でした。しかし、その前には花壇もあり、小綺麗な感じの墓で、波乱の生涯をたどった彼が眠るのにふさわしい場所という印象も受けました。私がパチパチ写真をとっていると、幾人かそばを通り過ぎ、有名な音楽家の墓でなく、変な墓を写真にとっている変な日本人にけげんな顔をしていました。

オットー・バウアーを研究していることで、私はオーストリアの研究者たちに好意的に迎え入れられました。極東にある日本の研究者がよくもバウアーを、と驚きの表情で迎え入れられたのです。9 月に労働運動史研究家の国際会議で

あるリンツ会議に出席した折り、中央大学の伊藤成彦氏に、リンツ会議の幹部の人々にバウアー研究者として紹介され、これをきっかけに多くの知人ができました。もっとも食事の時は、いつも慣れないドイツ語の会話に緊張のあまり、軽い胃潰瘍になったのですが。

11月に、4 万人の学生を抱えるウィーン経済大学の国民経済学研究所にエヴァルト・ノボトニー教授を訪れた時のことです。教授は、社会民主党の国民議会議員で、フラニツキー首相の経済政策ブレインでもあるオーストリアでは著名な人物です。この時には私は、金沢大学経済学部での新規講義「ヨーロッパ経済統合論」の準備の一環として、「EU加盟後のオーストリア経済と社会福祉国家の危機」という研究テーマを設定していました。この研究テーマにとってもっとも適切な指導教授として、労働運動史研究所のマーダターナー所長、社会民主党地区党組織事務局長のモニカ女史から、ノボトニー教授を紹介されました。握手を交わした後、私は一応バウアー研究者でもあるとも自己紹介しました。これを聞いてノボトニー教授は、親しみに満ちた笑顔をみせました。教授は、経済大学の有力者のひとりで、秘書を 2 人もち、助手、博士論文を書いている院生たちを抱える一国一城の主です。客員研究員にしてくれるように頼んだら、すぐその場で原稿を書き、秘書に渡して客員研究員の証明書を作ってくれました。その他に教授の論文の抜き刷り、オーストリアの経済政策に関する新著の校正刷りをいただきました。助手院生とともに近くのレストランに行き、教授に昼食をご馳走になったのですが、その折りの紹介で、教授は、私がバウアー研究者であることを強調していました。1 月、帰国に際して教授に別れの挨拶をしに行ったとき、教授は、日本の研究者と共同に研究することは望ましいことだと、次の留学の機会には私の迎え入れ体制を整えると約束さえしてくれました。

私は、ウィーン大学では、「EU加盟にいたる戦後オーストリアの経済の歩み」に関するバルツェラック教授の講義を最後まで聴講しました。3 人という少人数の講義で、教授がいつも目の前の机にすわり、私をじっと見つめて講義するので、冷や汗をかき、2 時間という講義が無限に長く感じました。教授は、日

本のバウアー研究者ということで珍しがっていました。『金融資本論』(1910年)の著者であるヒルファディングも研究していたと述べると、教授は、自分も証券取引所を研究しており、ヒルファディングのことは知っていると語っていました。後にウィーン市中心街にある経済労働銀行で3日間、オーストリア経済史家F.ブーチェック教授とバルツエラック教授の合同ゼミナールに参加した折り、バルツエラック教授はブーチェック教授に私をバウアー研究家として紹介していました。ブーチェック教授は、オーストリア政府と中央銀行が共同で創設したオーストリア経済研究所、すなわち政府の経済運営のためにオーストリアの統計と経済分析、景気予測を行う重要な研究所に勤めています。帰国間際、最新のオーストリアの景気予測の説明を受けるため、オーストリア経済研究所に若い研究所員を訪れた折り、ブーチェック教授の研究室にも行ってみました。ちょうど、バルツェラック教授もそこに居合わせ、2人と話がはずみました。両教授とは、日本への帰国後、インターネットで常に連絡しあおうと約束を交わしました。許しを得て両教授をビデオカメラにおさめたとき、2人はうれしそうに肩を並べていました。

オーストリアの政治・経済運営は、労働側の労働組合総同盟と労働会議所(公的機関)、それに企業側の工業同盟と経済会議所(公的機関)の4つの組織を中心になされます。この4つの組織は、首相、関係大臣をも交えて社会パートナーシップ委員会を形成しています。政府の法案はほとんど、この委員会の合意を得て国会に提出されます。オーストリアのこのシステムはネオ・コーポラティズムと呼ばれています。私は、経済会議所の統計部門のスタッフを訪れた折り、ノボトニー教授のもとで研究していると自己紹介したところ、統計部門のチーフにも引き合わされ、様々な統計資料の便宜をはかってもらうという僥倖を得ました。社会民主党地区組織のモニカ事務局長には、労働会議所の国民経済部門のクレーマ研究員を紹介してもらいました。クレーマー研究員は、バウアー研究とオーストリア経済研究を2本立てとしている私が会うべきもっとも適切な人物であるとのことでした。労働会議所にクレーマー研究員を訪問した折り、私は、バウアーの民族問題に関する拙著の目次の独訳を持参したの

ですが、これを見たクレーマ研究員は非常に興味を示し、国民経済部門のチーフに私を紹介してくれました。チーフは、バウアーの民族問題研究は非常に意義のある仕事だと指摘してくれ、そこから話が弾みました。チーフは、少し以前に日本の労働組合や全労済の代表団が自分を訪問したと語り、その折りの日本語のパンフレットを私にくれました。クレーマ研究員は、労働会議所図書館のシュツーベンフォール博士にも私を引き合わせてくれました。博士は、自分もバウアーを指導者とする戦間期のオーストリア労働運動史を研究していたと述べ、そして図書館を懇切に案内してくれました。ウィーン大学付属図書館が本の貸出しを申し込んで半日待たなければならないのに対して、労働会議所図書館は、所員もみな親切で、コンピュータで検索し申し込んで5分で本が出てくるという快適なところです。私は、帰国前の1ヶ月間、この図書館に入り浸り、最後の追い込みとして、バウアー関係資料、民族問題やオーストリア経済に関する資料を集めました。私は、シュツーベンフォール博士を通して、帰国間際に、バウアーに関する拙著2冊を労働会議所図書館に寄贈してきました。

オーストリアでは、オットー・バウアー支持者がほとんどいなく、バウアー研究も下火になっていますが、歴史上の重要な人物としてバウアーの評価は高く、バウアー研究者であることによって、私は多くの便宜を得、数多くの知人ができました。帰国間際の10日間は別れの挨拶とパーティでほとんどがつぶれました。別れの挨拶の折り、「あなたのおかげでオーストリアに来ることができた」と、私の身元引受人である抵抗資料文書館のW.ノイゲバウアー所長に感謝の意を表したところ、所長は目を潤ませていました。ウィーン大学社会経済史研究所のブルックミュラー教授は、「次回の留学の折りにはあなたのもとで客員研究員として学びたい」という私の願いを快く受け入れてくれました。ウィーンのシュベッヒャート空港から飛行機で日本に向かう帰路、私は、ウィーンにまた留学する機会がきっと来ることを予感していました。

(1997年2月脱稿)